

## 図書 紹介

### 研究不正

著者：黒木登志夫(東京大学名誉教授)

発行：中央公論新社／〒100-8152 東京都千代田区大手町 1-7-1／電話 03-5299-1830／

新書判／302 頁／価格 880 円（税別）／2016 年 4 月 25 日発行

本書によれば、「わが国では、2000 年まではほとんど目立った研究不正はなく、21 世紀から急速に増え、撤回論文数のワースト 10 に 2 人、ワースト 30 に 5 人の日本人が名を連ね、さらにワースト 1 が日本人」であり、日本は世界的に見ても研究不正大国である。

本著は、研究不正をテーマとし、STAP 細胞の H0 氏をはじめとして最終的には 42 の事例（そのうち 15 例は日本人）を挙げて、不正の種類、経緯、顛末、関係者のその後などを紹介し、分析している。

第 1 章 誠実で責任ある研究

第 2 章 21 の事例

第 3 章 重大な研究不正

第 4 章 不適切な研究行為

第 5 章 なぜ、不正をするのか

第 6 章 研究不正を監視する

第 7 章 不正の結末

第 8 章 研究不正をなくすために

次にサブタイトルを見ていく、第 2 章では、20 世紀以後の代表的研究不正事例 21 で、そのうち 8 事例は日本人で、事例 18 製薬会社に利用された循環器内科医や事例 21 虚構の細胞、STAP 細胞は記憶に新しいものも挙がっている。

第 3 章は、ねつ造／改ざん／盗用／自己盗用あるいは文章リサイクリング／重大な研究不正の頻度／生命倫理違反で、米国研究公正局の調査によると生命科学系の 133 の事例のうち、ねつ造 22%、改ざん 40%、盗用 6%、ねつ造＋改ざん 27%、改ざん＋盗用 4%等で、改ざん、ねつ造＋改ざん、ねつ造の 3 つで 90%を占めているという（事例 22-23）。

第 4 章は、不適切なオーサーシップ／不適切な出版／再現性のない実験／不適切な実験記録／利益相反／研究費の申請と使用などである（事例 24-27）。

第 5 章は、不正への誘惑／ボトムアップ型／トップダウン型／なぜ医学と生命科学に不正が多いのか／なぜ数学に不正が少ないのか／臨床医学の問題点／研究不正の多い国な

どで、論文撤回の多い国として、アメリカ、日本、ドイツを挙げ、研究先進国では捏造、発展途上国では盗用と二重投稿の研究不正が多いという(事例 28-30 のうち、28 は日本人)。

第 6 章ピア・レビュー／ソーシャル・メディア／ネット公開ジャーナル／公益通報者(警笛を吹く人)／研究公正正局(ORI)／ジャーナリズムで、撤回論文には、自分の論文を自分で審査する「なりすまし審査」が多くみられるという(事例 31-34 のうち、32-34 は日本人)。

第 7 章は、ノー・エクスキューズ／論文の訂正／論文の撤回／研究不正のコストなどで、「論文撤回はべき乗」になることを提起し、「20:80」の法則を見出したとある(事例 35-42 のうち、37、38 及び 42 は日本人)。

第 8 章は、研究倫理教育／若い研究者だけの問題ではない／研究不正の「ヒヤリ・ハット」／風通しのよい研究室運営／研究組織の責任／大学のガバナンスと学問の自由のバランスなどである。

本書では、研究不正は大昔からあり、ガリレオ、ニュートン、ダーウィンなどの研究にも問題があったとしたうえで、20 世紀以後の研究不正の代表的事例 21 を取り上げている。筆者はこのなかで、「わが国では、研究不正が 21 世紀に入ってから急速に増えてきた」とし、その原因を「国立大学の法人化(2004 年)の前あたりから、大学の財政が苦しくなり、研究資金の選択と集中が進み、研究者たちは圧力とストレスにさらされ、不正に走る人が増えてきたのであろう」と推測している。

筆者は、重大な研究不正として、ねつ造、改ざん、盗用及び生命倫理違反、不適切な研究行為として、オーサーシップ、出版、再現性、実験記録、利益相反及び研究費管理を挙げて、それぞれ考察し、後者を減らしていくことが研究不正防止策の一つとして大切であると述べている。しかし、不正は、人間が根本的に有するもので、不誠実さや驕りや傲慢さから、引いては弱さや愚かさからくるものであるから、結局はなくなるであろう。

本書では、研究にまつわる不正や本邦初出の資料やデータを駆使して、研究不正を検証し、予防策まで示した初めての本である。会員諸氏には是非一読を希望する次第である。

(学会事務局)